



CONTENTS

- 1 安曇野古代史のヒーロー・・・・・・・・・・丸山祐之
- 2 文化財で地域おこしすること・・・・・・室 正一
- 3 二年目の邪馬壹国研究会・・・・・・・・・・鈴岡潤一  
安曇のロマン・・・・・・・・・・丸林一孝
- 4 歴史は変わる！その2・・・・・・・・・・池田義光
- 5 ニッポン全国「穂高見命」めぐりの旅・・古川幸男
- 6 梓弓について・・・・・・・・・・岩淵軍平
- 7 安曇野を偲んで・・・・・・・・・・保高明彦  
歴史とロマンの狭間で・・・・・・・・・・川崎克之
- 8 編集後記・・・・・・・・・・松尾 宏

発行:安曇誕生の系譜を探る会 発行責任者:丸山祐之 編集委員長:本郷敏行 事務局長:川崎克之 〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3



## 安曇野古代史のヒーロー 会長 丸山祐之

安曇野の古代はどのような経緯をたどってきたのでしょうか。縄文、弥生、古墳時代を経て奈良・平安へと続く中で、古墳時代末期から8世紀の奈良時代における安曇野の古代史解明の最大のヒーローは何といても「安曇部真羊」と「安曇部百鳥」ではないでしょうか。

この二人は言うまでもなく、正倉院御物で天平宝字八年十月（764）の年号名のある調布に記されている「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊」と「主当郡司主帳従七位上安曇部百鳥」のことです。安曇部がこの安曇野/安曇郡にいたことの唯一ともいえる根拠であり、よくぞ残しておいてくれたと感謝するばかりです。

大和朝廷による全国統一が6世紀ごろから徐々に進められ、7世紀半ばにほぼ中央集権体制が確立したといわれています。その中で安曇郡は大和政権の下で5世紀に入って発達した部の制度と深く関係しているのではとのことです。大化の改新の詔によると「庶政を扱う郡司は国造と対等の位置に並ぶ。考え方が清く私欲がなく、必要な勤めに耐え得る者を大領・少領とする。たくましく聡明俊敏で書算の優れし者を主政・主帳とする」とのことです。

また「部」とは大王・王族、豪族に隷属し、生産物の貢納や労役の奉仕を行う集団で、およそ次の3種類に分類されるようです。

- 1) 職業内容を名称とした部で、品部とも呼ばれ、朝廷に直属していた職業集団。
- 2) 大王・王族の特定の者に直属する集団。その中で朝廷に出仕して職業的に奉仕する者と、屯倉に居住して農業に従事する者がいた。
- 3) 豪族の氏族名を付した部で古くは部曲といわれた。豪族の私有民であると同時に朝廷に出仕し、職業的に奉仕する任務も負っていた。

以上、会の勉強会に参加して得た知識・理解の一端ですが、それに付随して出てくる興味は尽きません。安曇郡の郡司主帳また安曇部は安曇氏（族）を越えて任命され、その役割を果たしていたのだろうか、前科郷の貢納物は麻布だけだったのだろうか、安曇郡の他の三郷（高家・八原・村上）にもそれぞれ安曇部が任命されていて、犀川を遡上した鮭や山麓の牧で生産した馬などの貢納にも関わっていたのであろうか・・・・・・・・

## 文化財で地域おこしすること ～下高井郡木島平村の事例から～

木島平村地域おこし協力隊 室 正 一

安曇誕生の系譜を探る会の皆さん、はじめまして。そして旅の参加者だった皆さん、お久しぶりです。

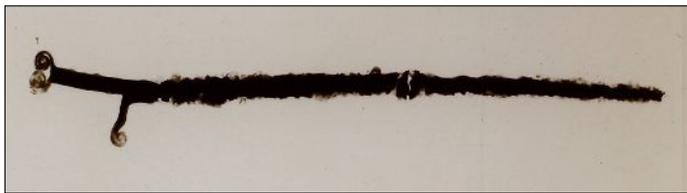
昨年11月12日に、木島平村で「ふるさと資料館」と「根塚遺跡」をご案内した室（むろ）と申します。ご来村いただきまして、誠にありがとうございました。

私は文化財を扱う「地域おこし協力隊」として、木島平村に赴任してから2年目を迎えますが、短い間に勉強できたことを満足にお伝えできたかどうか、いまでも不安に思っております。そこへ今回の寄稿のお話をいただいたのですが、「文化財で地域おこし」という大変なテーマをいただきまして、少しでも自らの体験をお伝えできればと思い、筆をとりました。

私は大学院を卒業してすぐ、木島平村に「地域おこし協力隊」として赴任してまいりました。平成28年5月のことです。「地域おこし協力隊」とは、都心部から人を募集し、最長3年任期のあいだに地域の課題を見つけ、解決をはかりながら起業・定住などを目指す制度です。活動内容はそれぞれ異なりますが、主に農業や伝統工芸の後継者を求める例が多いようです。

私の場合、「資料館の運営に携われる方」という他に、「埋蔵文化財の発掘調査ができる方」という全国的にも珍しい募集でしたが、大学院時代に東京都の発掘現場を渡り歩いていたこともあり、応募に踏み切りました。

木島平村は、「弥生時代の王墓」とされる根塚（ねつか）遺跡を発見したことで、全国から注目を集めています。扇状地の端にある丘「根塚」に立地したこの遺跡は、邪馬台国の卑弥呼が現れるころに、飯山盆地一帯を治めていたと考えられる有力者の墓でした。古墳のような遺跡ですが、弥生時代のそれは「墳丘墓」と呼ばれています。



「王墓」とみなされた理由は、規格外の大きさを持つ遺跡の大きさもさることながら、北陸地方との関係をうかがわせる土器やアクセサリ、鉄剣が豊富に出土したことが挙げられます。中でも「渦巻紋装飾付鉄剣」（写真）と命名された剣は、朝鮮半島南部の伽耶地域で鍛えられ、いまなお日本でただ一つの鉄剣であることが、根塚遺跡の重要性を決定的なものにしました。

名前の由来となった三つの渦巻飾りは、朝鮮半島では高貴な人物にしか許されないデザインとされます。さらに柄と刀身の軸が曲がっていることから、鹿の角を柄に用いる日本的な形状を反映した特注品といわれています。

74cmという大きさも、弥生時代の鉄剣としては最大を誇ります。

この鉄剣だけでも、根塚遺跡は県指定史跡の評価を得ています。しかし、他の出土品や遺跡そのものは、発見から20年経ったいまでも評価が定まっていない部分があり、研究と見直しを進めなければなりません。そのために、根塚に近いもう一つの塚、「平塚」を発掘することで、さらなる一歩を踏み出そうという計画が、協力隊の募集につながったのです。

大変な遺跡を相手にする一方で、早々に衝撃を受けたのは、これほどの文化財をもちながらも、「根塚って何がそんなにすごいのか？」という疑問を、地元の方々から多くいただいたことです。話題には出るものの、どれほど大事なものなのかは、必ずしも一般に知られていたわけではありませんでした。

文化財は、すぐに活用できるものではありません。鉄剣のように数少ない例外はあっても、多くはそれのみで役に立ちにくいものです。文化的な価値を評価し、風土や他の文化財と結び付けることで、その地域にしかない個性を描きだせるようになります。そうしてようやく、根塚遺跡をはじめ、村の文化財がどのような意義を持ち、どれだけ自分たちの地域がかけがえのないものなのか、知ってもらえることができると考えています。

地元の人々が、よそに二つとない土地に暮らし、引き継いだ文化財とあることが誇れるようになれば、経済的価値とは違った意味で、豊かであるといえないでしょうか。反対に、地元の人が「なにもない」という土地ほど、観光的にもつまらなく、住んでいても貧しいと感じてしまうでしょう。

教科書に出てこない地方でも、石碑や祠、神社仏閣、田畑から出た石器や土器の欠片など、先人が歴史を紡いできた証拠はたくさん残されています。私はそれを活用できるように整理し、研究し、紹介していくことが、文化財で「地域おこし」することの初歩だと考えています。たいへん地味で根気のいる活動ですが、その地域に住んでいなければできない仕事です。

最後に一つ。会員の皆さまのように、地域の歴史や文化財にまなざしを向けることも、立派な「地域おこし」のひとつです。皆さんにはぜひ今後も、その地域でしかできない学びを続けていただきたいと思います。

また木島平村へ立ち寄ることがあれば、ぜひ「ふるさと資料館」までお越しください。この度は、ありがとうございました。

## 二年目の邪馬壹国研究会

邪馬壹国研究会 鈴岡潤一

「邪馬壹国研究会」は、「古田史学の会・松本」を継承し、基本的に卑弥呼の国が北九州にあったと考える研究会です。

準備会が発足した2016年秋に、北九州で巨大な土塁が発見されました。それは太宰府を防御する土塁で、巨大な「都城」を持った政治権力の存在を示します。また、同じころ弥生時代の三雲・井原遺跡から硯が発見されました。硯が弥生時代に存在するということが、『日本書紀』が示す歴史は語ってくれませんが、昨年末には、福岡市の南に位置する筑前町の弥生時代の遺跡からも硯が見つかりました。

長野県でなぜそうしたことを研究する意味があるのでしょうか。

その回答の一つは、故古田武彦先生が、深志高校教諭時代に、「天の原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」についての生徒から受けた質問「天の原はどこにあるのか」です。

回答のもう一つは、長野県には、九州系の、例えば「安曇神社」や「高良大社」が存在することです。

奇数月に開くとして始まったこれまでの例会では、次のことを考えてきました。

①『魏志倭人伝』の〈邪馬壹国〉がどこにあったのか。素直に読むと〈北九州〉であろう、と結論した。

②長さの単位について考えた。1歩は、25～25.7cm、1尺は245mm。法隆寺、都府楼跡で用いられた「尺」と

同一。卑弥呼の墓「径百余歩」は約30mの円墳。

③銅鏡の銘文の稚拙さから多くは国産鏡と判断。また、「景初3年」「景初4年」銘について考えると、特に「4年」は魏で作るはずはないし、その年（240年）においてしか存在しえないと判断。

④『宋書』を読む。「倭の五王」は『日本書紀』が記録する天皇家とは無関係であると判断。

⑤『隋書』を読む。阿蘇山のある国の君主は、妻と後宮を持つ男性で「阿每多利思北孤」とある。607年の国書では、「日出処の天子」が中国・北朝系「隋」の天子宛てに書き、対等の立場を主張。国内では、独自の元号を使用し、522年「善記元年」から700年まで連続した。『旧唐書』は、卑弥呼以来の倭国とは別の「日本国」があるとしている。その北と東は山で遮られている。

2018年1月には、信濃における〈邪馬壹国〉の存在について考える最初の会をもちました。まず、「八面大王」について考えました。「八面＝やめ＝八女」王統をく鬼として退治した坂上田村麻呂と仁科氏勃興を連携した行為として位置づけ、その目的を九州王朝に対する畿内政権の勢力拡張と考えてみました。報告では、さらに、信濃国府の北信からの移転も、畿内勢力の拡大を意図するものと考えてみました。畿内での政権発足の曖昧さが、地方史＝信濃国府移転の〈わからなさ〉と符合するかもしれません。探求はこれからです。先達である皆様からご教授頂けたら嬉しく思います。

## 安曇のロマン 丸林一孝

私はこの会の名称にロマンを感じ昨年3月から入会させていただきました。

勤務先を退職する前から地区の神社や自治行政に携わる要職を依頼され職務を全うするうちにこの郷土の成り立ちや地名の由来が気になっていました。特に我が家から西方に扇状地が3カ所見えるのですが、どれも扇頂がほぼ同じ高さに見えます。この扇状地のでき方について学校教科書の記述には前々から疑問を感じています。

古くから伝わる伝説のとおり湖水があって上部から土砂流が発生していたならば水面下に扇状地が綺麗にできあがることは簡単な実験で確認できます。安曇野の扇状地生成には湖水面が重要なのです。また安曇野地域には湖に関係すると思われるが意味の良くわからない地名もあり何かと惹かれます。意味不明な地名は古代語で説明できると知り探していると「信州のアイヌコタン」（百瀬信夫著）という本が出版されていることがわかりました。早速3巻を古本屋から購入し読んでみると残念ながら私の地区については触れていませんでしたが、古語による解釈から松本平は昔「湖」であったということが書かれていてとても感銘しました。

さて、その本によりますと具体的に湖の水位が最初に標高700mの高さまであったとしてその等高線沿いに扇頂があり有名な神社も存在しています。それから安曇（アヅミ）とはアツイ（海）＋ムィ（岬などの陰になっているような波静かな海、入り海）と二つの言葉が一つになった「波の静かな入り海（または太湖）」の意味であるとして各地にあるアヅミはそのような所を指していて各地に存在すると述べています。（具体例は省きます）これらのことから結論として北九州を本拠地とする海神系の安曇族移動説は明らかに誤りだと書いてありました。

この結論には共感できないので私も調べようとしていた折り一昨年から高齢の母親の介護が必要となりストレスが溜まった状態でした。でも今は妻の後押しもあり親の不在の時はマレットゴルフや講座・勉強でストレスを発散しています。

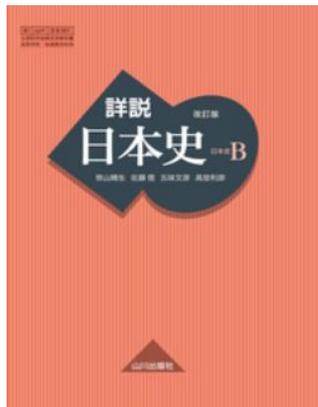
勉強ではNHK文化センターと信州大学（地域支援解放授業）の地学の授業を受けてきましたがボーリング調査の結果、有機物や泥などの堆積物は無かったとして湖説は疑問視されています。湖説には期待していたのですが逆に安曇族の移動説も有望になるわけで、この会に入会した甲斐があったなあと思います。

# 歴史は変わる！ その2

池田義光

過去は変わらないのだから、歴史的事実や考察は変わらないと思いがちである。しかし、かつて私たちが知っていた歴史的出来事や考察は、新しい史料や遺物などの発見や研究の進展によって変わり、それによって教科書が書き換えられるということは、実は多々あることである。今回はそのうち、原始時代や古代の歴史の中からかつてと変更されたものを、前回に続いていくつか紹介する。

## 1 日本列島にはいつから人が住んだのか？



**【従来の説】** 1970年頃から、民間研究者の藤村新一氏により旧石器時代の遺跡が次々と発見され、宮城県上高森遺跡から出土した石器は約60万年前の最古のものとして推定された。ところが、2000（平成12）年に、藤村新一氏がこれらの旧石器発見を捏造していたことが判明した。

## 【現在の高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】

「現在までに日本列島で発見された更新世（約1万年よりも前）の化石人骨は、静岡県浜北人や沖縄県の港川人・山下町洞人など、いずれも新人（ホモサピエンス、約4～3万年前から）段階のものである。」

## 2 縄文時代の始まりはいつか？

**【従来の説】** 今から約1万年前から縄文時代が始まった。縄文時代は、早期・前期・中期・後期・晩期の5つの時期に区分されて考えられた。

**【現在の説】** 今から1万数千年前から、縄文時代が始まった。縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つに区分されるようになった。

## 3 稲作はいつ始まったのか？

**【従来の説】** 弥生時代の始まりが稲作の始まりとされた。

**【現在の説】** (1)水田耕作による稲作は、縄文時代の終わり（晩期）には北九州地方に伝わっていた。（1978年に福岡県福岡市板付遺跡から縄文時代晩期の水田跡発見）

（1981年に佐賀県唐津市菜畑遺跡から縄文時代晩期の水田跡発見）（1981年に福岡県福岡市野多目遺跡から縄文時代晩期の用水路と水田跡と磨製石包丁発見）

(2)陸稲の栽培は、水田耕作の水稲より古く、岡山県総社市南溝手遺跡から縄文時代後期中頃に陸稲による稲作の証拠が見つかっている。しかし陸稲は水稲より実りが少なく、草取りも大変で、連作もきかないので、社会へ与えた影響は後の水田耕作による稲作ほど大きくはなかった。

## 4 弥生時代の始まりはいつか？

**【従来の説】** 弥生時代とは弥生土器を使っていた紀元前300年頃～紀元後300年頃の約600年間

## 【現在の中学教科書：教育出版『中学社会 歴史』】

「紀元前4世紀になると、稲作などの新たな文化は西日本一帯に広まり、やがて東北地方まで伝わりました。このように、稲作が始まり、弥生土器や金属器を使うようになった時代を、弥生時代といいます。」（注：弥生時代の始まりについては、紀元前10世紀ごろとする説もあります。）

## 【現在の高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】

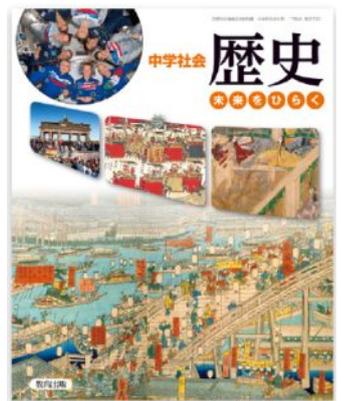
「紀元前4世紀頃から紀元後3世紀の中頃までの時期を弥生時代と呼んでいる」

## 5 古墳時代はいつからいつまでか？

**【従来の説】** 紀元後4世紀から7世紀。この時代を政治史のうえで「大和時代」と呼んでいた。

## 【現在の高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】

「古墳が営まれた3世紀中ごろから7世紀を古墳時代と呼び、これを古墳がもつとも大型化する中期を中心に、前期（3世紀中頃～4世紀後半）、中期（4世紀後半～5世紀末）、後期（6世紀～7世紀）に区分している。古墳時代後期のうち、前方後円墳がなくなる7世紀を終末期と呼ぶこともある。古墳時代の終末期は、政治史のうえでは飛鳥時代にあたる」



## 6 箸墓古墳はいつのものか？ 卑弥呼との関係は？

**【従来の説】** 4世紀に築造されたので、卑弥呼の没年とされる247、248年とは差がある。（つまり卑弥呼の墓ではない）

**【現在の説】** 遅くとも3世紀後半の築造で、国立歴史博は240年～260年とする（卑弥呼の墓かもしれない）

## 7 「任那日本府」については？

**【従来の説】** 紀元4世紀に中国東北部から起こった高句麗は朝鮮半島北部まで領土を拡大し、その南部に百済と新羅があり、その南端の任那には「任那日本府」という統治機関があって、百済や新羅を支配していた。（これが昭和期、特に戦前の軍国主義時代の説）

**【現在の説】** 朝鮮半島南端にあった小国家の総称を「加耶（加羅）」という。「任那」はその中の一国。そこに「任那日本府」というヤマト政権の統治機関があってしかも百済や新羅を支配していたという説は否定されている。

## ニッポン全国 「穂高見命」めぐりの旅 その2

特別編 「穂高見命」の墓をさがれ！！ 事務局次長 古川幸男

お待たせいたしました。連載一回で打ち切りになったわけではありません（笑）前号は、10周年記念号ということで、川崎事務局長よりおちゃらけネタ禁止をくらい、皆様より「ど～した」「楽しみにしてたのに」って、ご心配をいただくことは一切無く、注目度の高さをヒシヒシと感じました（泣）

今回は、祝・帰ってきたニッポン全国「穂高見命」めぐりの旅・特別編でお届けします。



図一①

さて、早速ですが、図一①をよ～くご覧ください。この図は「善光寺道名所図会」に掲載されている穂高神社の絵図です。

「善光寺道名所図会」は皆様もよくご存じとは思いますが、「知らね」って方もいるかもしれないので、少し説明しておきます。江戸時代後半、庶民の間に「寺社参拝」という名目の、空前の旅ブームが到来しました。

「死ぬまでに一度は善光寺参り」といわれ、多数の老若男女が押し寄せました。この旅ブームは「名所図会」と呼ばれる観光ガイドブックを各地で産み出します。善光寺でも1849年に名所旧跡を紹介したガイドブックが刊行されました。それがこの「善光寺道名所図会」著者は豊田利忠、版元は名古屋の書店・美濃屋伊六です。

さて、この絵を見て「なんだよ知ってるよ」「今さらなんだ」って思われた方もいらっしゃるかもしれません。たぶん皆様一度は目にされていると思います。しかし、図の左上に「穂高見命御陵」とあるのを、皆様見落としてませんか？？本殿三宮のうしろにマウンドがあるじゃないですか！！「こりゃなんだ？」「本当にあるのか」「御陵ってお墓では」このことに気づかれている方は意外と少ないことが判明しました。

早速、調査です。今回は穂高神社様にご協力いただきましたが、本殿裏はご神域で立ち入り禁止のため、残念

ながら入れませんでした。

穂高神社の等々力様におうかがいしたところ、「こんなものはありません。あつたらメチャクチャ大切にされています」との、ありがたい回答をいただきました。現場はただの更地で森になっているとのこと。ただ、何か心当たりは無いかお尋ねし、穂高宮司にも確認していただいたところ、穂高神社の西にある（JR線の手前）お墓に年代不明、だれが埋葬されているかも一部わからないマウンド（土まんじゅう）があるとのこと。これが穂高見命の墓って事になってしまったかも？しかも距離も短縮されている……



写真一②

う～ん、本当にあつたら面白かったのにい～。結局、本殿裏にお墓はない！って事があつという間に判明。めでたしめでたし。でも、これからもこの様な謎の小ネタをどしどし拾っていきます。心当たりのある方、小ネタをお持ちの方、いらっしゃいましたらご連絡ください。おっと、そう言えば穂高神社の等々力様から面白いネタをお聞きしました。上高地の、場所は不明だが、どこかに「三十塚」というところがあり、そこに安曇族のお墓がいくつもあるって伝説があるとのこと。ぎゃ～、ホントかよ……しかし興味深い！近日中に調査に行こうと心に決めました。

だんだんこの連載の主旨からズレてきてしまっている。大丈夫か？俺。

この絵を見て、他にも「あれっ」「なんでっ」って気づいた方いるかと思えます。私は「大人の事情」の為、そのことには触れません。掘り下げません。興味のある方は、このネタは差し上げますので、勝手に、いやご自由に調べてみてください。（思わぬ掘り出し物があるかも）

さあ、いよいよ次回こそ仁科神明宮へ。簀社の謎とは？？本当に行くのか！？連載は続くのか！？ 乞うご期待！！

# 梓弓について

岩淵 軍平

梓弓とは梓の木で作られた弓のことである。

弓という詞はユガミの形からユガミぬるによれり、といわれる。

その弓の材料は「ミズメ」である。別名ヨグソミネバリ、アズサカンバとも言う。

倭名抄には梓の木を和名「阿都佐」と載せているが、これは中国の梓木が梓と材質が似ていることからの宛字とされている。「古典の新研究」によると、梓は樺科の峰櫨であり、信濃、甲斐、越後、武蔵、遠江、伊勢に産し材質は固く、弓に好適な強木であるとし、元慶二年（878年）の官符（朝廷の命令書）に、梓は信濃国より採進すべきよし定められたり、としている。

この木は非常に堅木のために斧の柄が折れるとして斧折の名が生じたほどであり近世専ら犁（すき）の柄などに用いられた。

梓弓が何故有名かという、「万葉集」などに見られる歌が、梓弓を枕詞として使用されているからと思われる。当時は弓の材が何であるかに拘らず弓そのものを一般に梓弓と呼んだ。各地区では、それぞれに適応した材で弓を作ったが、梓弓が特に顕著であったためではないか。

では、梓弓という名前はいつごろ付けられたものかを調べるに、梓弓という初見は大宝二年（702年）であるが、万葉集に梓弓が載っていることから400年以降702年以前であろう。

信濃国における梓の木に関連した地名などはあるか調べてみると、松本市梓川の梓、南佐久郡川上村にある梓山、川の名前の梓川など。

梓弓に使用する征矢（戦闘に用いる矢）を作っていた松本市征矢野。梓川という川の名前は梓の木を産地から伐り出し梓川へ流したため、川名が付いたものであろう。

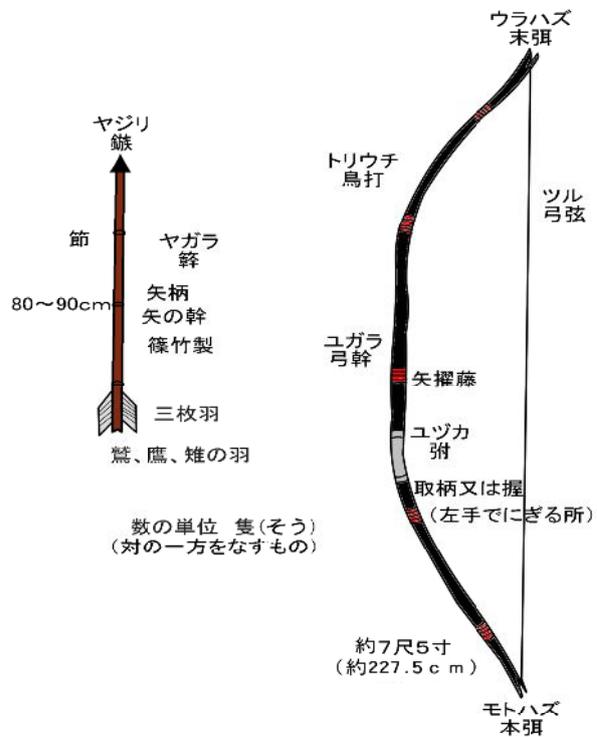
梓川村誌によれば古代の貢納物として梓弓のことが、次のように載っている。

- ・大宝二年（702）信濃国より梓弓1020張を献じ大宰府に送る。（続日本紀）
- ・慶雲一年（704）信濃国より梓弓1400張を献じ大宰府に送る。（続日本紀）
- ・元慶二年（878）信濃国より梓弓200張が朝廷に貢進される。（三代実録）
- ・諸国からの献上品の中に信濃国からの弓36張がある。（延喜式）

村誌以外で天平勝宝八年（756）梓弓84張がある。（東大寺献物張）

梓弓は武器としてのみでなく祭祀の幣物の一つとしても使用された。

弓と矢の名称



〔国史大辞典〕から 岩淵

弓の文化の変遷は縄文時代から弓は狩猟に使われていたが、狩猟に頼らなくてよい稲作が普及した。時代が進むにつれ民族間の争いに武器として使用された。鉄砲の伝来（1543年）により弓の使命は終わった。其の後、現代においては趣味の弓道などの一環として使われている。

梓巫女について、巫女の呼称は地方によって異なるが、主として東日本では梓巫女と称される。

本来、梓弓は神霊が座す依代あるいは、採物であったが、梓巫女は弓の弦を鳴らしたり振ったり叩いたりして忘我や神がかりの状態になり、神意を知り、これを人に伝えるという女。梓巫女の使用した弓は一般に竹ノ弓が用いられた。口寄せの時に臨んで必ず其弦を鳴らすと云う。弦は婦人の髪の毛を麻に撚り合わせたものを用いたと云われる。

梓弓関連文献は「国史大辞典」がよい。ここで梓弓の説明をしているが、これは鈴木敬三の「古典の新研究」からのものである。

「古典の新研究」をみると「古今要覧稿」を参考としている。「古代中世の信濃社会」も参考になる。

## 安曇野を偲んで 春日井市 保尊明彦

安曇野の南穂高村で育ち、昭和38年に名古屋の会社に来てから50年以上になります。今までお会いした殆どの方が私の苗字の呼び方が判らず、併せて出身地を聞かれます。「安曇野の出です」と答えるとすべての人から「いいところですね」と言われ気分を良くしています。

以前から「我が家の祖先は海洋民族のアヅミ族につながるホタカ一族である」程度の認識はありましたが、近年「安曇誕生の系譜を探る会」の活動を知り、入会して情報を頂き調査し始めています。

①ホタカ一族について・・・安曇野中心に3グループがあり、穂高姓は91人（安曇野3軒、松本8軒、塩尻1軒、岩手に約同数）、保高姓は147人（安曇野6軒、松本他長野県内35軒、新潟30軒）、保尊姓は28人（安曇野16軒、愛知・大阪・北海道等に1～2軒）となっています。

穂高神社近く（西方）に保尊姓の集落13軒あり、ここの父の実家に現存する最古の位牌は天文5年9月（1536年）で約500年前です。

天文2年（1532年）にホタカ一族の集落の中で氏争い（本家筋争い・庄屋への訴状が現存）が発生した。判決では「私共の保尊一族の方は分家筋で我慢するように」とされ、その代わりに良い字「尊」を与えられた。本家の大爺さんは生前「尊」の字は松本城の殿様から頂いたものだと威張っていたが、これは疑わしい。この混乱の際にホタカ一族の一部は保高、保尊に文字が変わったと思われる。「穂→保」

②渥美半島（田原市）で地元の方との懇談の機会があり、出身地を聞かれ「安曇野です」と答えたら、「先祖は同じですね」と言って握手されました。厚美には安曇系を自覚している人が多いようです。

③穂高岳山頂の嶺宮が整備されたようですね。最高峰で大きな山塊を後から来た海洋系の安曇族がどうして名前をつけ、穂高神社の神域として祀ることが出来たのでしょうか？個人的には登山に熱中して特に意識せずに何度か登っていたことに特別な感慨を感じています。

④エゴ（イゴ）、オキュウト

博多では普通の食料品店で筒状のビニールに入れてすぐ食べられるようにしたオキュウトを販売しています。原料のエゴノリは根が着底せず大型の浮遊海藻に付着して成長する特殊な海藻です。一説には高級中華料理に使うツバメの巣の原料と聞いており、中国江南地方の風習で移動してきた民族の慣習でしょうか？

⑤犀竜伝説、竜の子太郎伝説

扇状地は通常は水が無く小石ばかりの荒地で住民が居なかったが、先進の稲作技術と鉄器で開墾して定住した。大雨時は洪水、土石流および一時的な小規模湛水等が出来やすく、そこから出た伝説か？

⑥岩手県に穂高姓が長野県と同程度（35名）、宮城県・北海道に安曇姓が計50名・・・安曇野と関係があるでしょうか？

⑦綿神社 名古屋市長賀町に安曇系の「綿神社」があります。

以上、思いつくままに書いてみましたが、ご教示いただければ幸いです。

## 歴史とロマンの狭間 川崎克之

安曇野案内人倶楽部で観光客や地元客相手に時々ボランティアガイドを行っています。穂高神社をスタートして等々力地区の道祖神を巡り大王わさび園をゴールとするコースが人気です。安曇誕生の系譜を探る会の会員の私にとっては穂高神社のガイドが最大の難題です。

観光ガイドとしては、「山国信州に海の民である安曇族が入ってきて安曇野を開拓し、奥穂高岳に降臨された安曇族の祖神である穂高見命を穂高神社に祀りました。穂高神社で毎年9月27日に行われるお船祭りは、白村江の海戦で戦死した安曇比羅夫の霊を慰める鎮魂の祭りと言われていて、9月27日は安曇比羅夫の命日とされています。」と説明した方が古代のロマンというのでしょうか、お客さんも興味を示すなど反応が良いのですが、系譜を探る会の会員としては、悩ましいところです。

鎮魂の祭りであるということは、どうやらその昔神社の関係者でどなたか知恵のある方が安曇比羅夫の鎮魂の祭りと言いつつ始めてからのことのように思えます。鎮魂の祭りは想いさえあればいつからでも始められますから、このこと自体は否定されるものではありません。

しかし、この祭りをもって、海の民である安曇族が安

曇野に入ってきた証拠だとし、さらには安曇比羅夫が安曇野出身だと言うに至っては苦笑を禁じえません。ムキになって否定するほどでもないんですが、本に書かれたり大勢の人が言い出すと、それが通説みたいになってしまいます。所謂俗説でしょうか。

考えるとこれに類した話が古代史研究の中にはたくさんあるようです。安曇族に関する論考についても同じことが言えます。史実の裏付けとなる証拠が乏しいために「溺れる者藁をも掴む」思いで、批判もせずに自説に採用してしまう。自説に都合の良い部分は採用し、悪い部分は無視する。見立てが先行するから物語としては論理的かつ面白いものが出来上がります。推理小説と見紛うばかりです。藁もなえば縄となり、束ねれば水に浮かぶ筏になるということでしょうか。

安曇族ありきで安曇野の古代史を考えることをやめる。その上でイチから始める。歴史探求の第一歩ですね。しかし、言うは易しで行うは難しで、残念ながらそのような能力は持ち合わせておりませんので、当分は先人の労作を熟読玩味して、自分なりの推論を加えつつ、歴史とロマンの狭間をウロウロと彷徨いながら楽しんでいこうと思っています。

創立10周年記念事業 事務局長 川崎克之



中野市立博物館にて

記念講演会 「古代の海を巡る謎に迫る！」

講師：日本考古学協会会員・俳優 荻谷俊介氏

日時：10月22日（日）午後1時半～3時

高校生時代から遺跡発掘に興味を抱き、俳優になってからもロケ現場の近くで発掘調査が行われていると聞けば、頼み込んで参加させてもらうことを繰り返すうちに、考古学にのめり込み、今やライフワークとして取り組んでおられる荻谷俊介氏。

これまで考古学は発掘成果を自分の意見を介入させず正確に記録する実証学問といわれてきたが、これからの考古学はそれだけではなく、自分の推量を入れて考察していくことが必要だとする。今回は「倭王権と臨海古墳」をテーマとして、倭王権と海人族の関りについて大胆な推論を展開していただいた。

氏によれば、縄文時代に国東半島の沖合に浮かぶ姫島で産出された黒曜石が瀬戸内方面に多量に運搬され、各地の遺跡から出土していることから、舟による物資輸送の瀬戸内ルートが既に縄文期に確立されていたという。これを担ったのが海人族で、加工場を伴う遺跡が山間地まで存在するという事は、海洋性集団の移住という意味で興味深いとする。

また、倭王権は、在地の政治集団と連携することによって、瀬戸内航路上に飛び石的に重要拠点を設けて勢力を拡大していったとし、そのネットワークを担った海人族抜きには倭王権は成立しえなかったとする。

瀬戸内臨海部には最高立地に築造されている前方後円墳が多く存在しており、こうした古墳は海上交通の目印となっていたとし、倭王権と繋がりを有する海人族の族長墓である可能性があるとしている。

また、大分県の小熊山古墳や亀塚古墳に見られる葺石工法から、海人族の大首長の墳墓の葺石工法から、海人族の大首長の墳墓の築造に西武瀬戸内の海人族が動員されたとし、海人族の結束力の強さ、行動範囲の広さ、そして情報伝達の速さを見ることができるとしている。

さらに、魏志倭人伝に記載されている邪馬台国と狗奴国との抗争はそれぞれ魏と呉を後ろ盾とする代理戦争であったとの、大胆かつ壮大な推論を展開していただいた。

「信用しないでください」と氏は繰り返し述べたが、これまでの考古学のイメージから一歩も二歩も踏み出した論考が印象的でした。

研修旅行 「奥信濃・弥生遺跡巡りの旅」

日時：11月12日（日）午前9時半～午後5時

講師：中野市立博物館 館長 土屋 積 氏

千曲川は弥生時代には日本海を経由して九州や朝鮮にも繋がる重要な交易ルートだったと考えらる。中野市の柳澤遺跡からは多数の銅戈や銅鐸が、木島平村の根塚遺跡からは朝鮮半島との強い結びつきを示す直刀と刻書土器が発掘されている。

中野市立博物館では土屋館長から銅戈や銅鐸の出土状況や栗林式土器の詳細な解説をお願いした上に、柳澤遺跡の現場においても臨場感あふれる解説をいただいた。

木島平村の室さんからは、地域おこし協力隊員として文化財で地域おこしをすることの重要性と楽しさを、地元の方顔負けの地元愛溢れる情熱で語っていただき、参加者一同感嘆することひとしおでした。

振り返ってみれば安曇野には「明科廃寺」あり、「北村遺跡」ありで、比類なき文化財に恵まれていることに今さらながら気づきました。



木島平村ふるさと資料館にて

編集後記

松尾 宏

◆「安曇人」は8年前の創刊号から、今回12号の発行となりました。「安曇誕生の系譜を探る会」の会報として会員の皆さんに、会の活動報告と会員やそれぞれの立場で歴史を研究されている方の諸説を掲載させていただいていきます。内容についてのご意見ご希望をお寄せください。より充実した内容の会報にしていきたいと思っております。

◆冬の寒さから解放されて日本列島を桜前線が北上し、安曇野の田んぼに水が入り荒くれ、代掻き、田植と稲作の季節へと移り変わっています。しかし近年生活の中での「米」離れが進んで「ごはん」の概念が変化しています。今年から政府も米の減反政策を廃止し自由に作り販売をする方向になりました。安曇誕生の礎となってきた稲作の行く末に思いを馳せ歴史の流れを感じる今日この頃です。

記念事業写真撮影・小松宏彰